

# 『透明な檻の中で3』

～ある家族と三つの時代の記憶～



KHJ岡山きびの会 “ふじきん”

## 目 次

### 序章：檻の中の静寂（光希の視点）

1. 閉ざされた部屋の気配・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2
2. 届かなかった絵と、鳴らない電話・・・・・・・・・・・・・・3
3. 祖父の死、物語の始まり・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3

### 第一章：義蔵の章（死を知る世代）

1. 祖父の聖域・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3
2. 箱の中の「鮮やかな生」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・4
3. 沈黙の連鎖・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5

### 第二章：誠一と澄子の章（沈黙の世代）

1. 良き妻・良き母の檻（澄子の視点）・・・・・・・・・・・・・・5
2. 以心伝心の断絶（誠一の二重性）・・・・・・・・・・・・・・6
3. 光希の檻と母の罪悪感・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・6

### 第三章：遥の章（役割に埋もれる長女）

1. 完璧な仮面の疲弊・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・7
2. 役割の重圧と弟妹への感情・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・7
3. 父との断絶と鏡・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・8

### 第四章：結の章（家を離れた次女）

1. 東京の自由と罪悪感・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・8
2. 家族の外から見た檻・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・10
3. 幼なじみ・陽菜との再会・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・10

### 第五章：光希の章（檻の中の声）

1. 祖父の遺言と、立ち尽くす自分・・・・・・・・・・・・・・・・・・11
2. いじめの記憶と「偽の平等主義」・・・・・・・・・・・・・・11
3. 妹・結からのメッセージ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・12
4. AI との対話、表現の再発見・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・12

### 第六章：再会の章（共鳴する沈黙）

1. 四十九日の静寂と、不協和音・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・12
2. 映し出された「心の風景」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・13
3. 崩れゆく壁・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・13
4. 初めての「声」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・14

### 終章：荒野に咲く花

1. 檻の解体作業・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・14
2. 光希の挑戦・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・14
3. 壁は、自分自身だ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・15

登場人物紹介・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・16

あとがき（作者の言葉）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・17

## 『透明な檻の中で3』～ある家族と三つの時代の記憶～

### 序章：檻の中の静寂（光希の視点）

#### 1. 閉ざされた部屋の気配

誰もいない部屋の中で、私は世界とつながっている。ただし、そのつながりは、音もなく、触れられず、まるで水の底から空を見上げているようなものだ。

外の世界から光が差し込む窓は、一年中、厚いカーテンに閉ざされている。朝も夜も、私にとっては同じ濃い灰色。ここにあるのは、呼吸の音と、パソコンのファンが回る微かな振動、そして、時々、階下から聞こえてくる家族の気配だけだ。

父の足音、母の皿を洗う音、姉が帰省した時の慌ただしい声。それらはすべて、私と彼らを隔てる透明な壁に、ぶつかっては消える残響だ。

私は、この見えない檻を自分自身で作り上げ、その中でひきこもっている。でも、この檻の素材は、僕一人で集めたものではない。父の背中、母の沈黙、姉の諦め、そして、僕が「迷惑をかけてはいけない」と飲み込んできた無数の言葉で作られている。

窓の外の世界は、今、「多様性」や「自己表現」を叫んでいるらしい。でも、僕の心は、小さい頃に刷り込まれた声が、ずっとささやき続けている。

「空気は読めよ。人に迷惑をかけるな。お前は、みんなとは違う」

この声が、僕の檻の番人だ。



## 2. 届かなかった絵と、鳴らない電話

かつては、この沈黙の中で、キャンバスに絵を描くことで、どうにか自分を保とうとしていた。でも、大学を辞めてからは、それすら手につかない。

最後に描いたのは、誰もいない荒野に立つ、一人の人物だった。飛ぶのか、落ちるのか、どちらかわからない。ただ、その足元には、無数の鎖が絡みついている。完成させるのが怖くて、その絵は部屋の隅で、裏返しに立てかけられたままだ。

今日もまた、スマートフォンには、家族会の代表からのメッセージが一件入っている。

**「光希さん、今月の会報のPDFと、イベントバナーの件、お願いできますか？ 光希さんのデザインのおかげで、サイトがとても見やすくなりましたよ。いつもありがとう」**

僕は、返信をしない。ただ、既読だけつける。この作業は、外の世界との唯一の接点だ。自分の顔も声も出さずに、誰かの「声にならない声」を、ウェブという静かな場所で届けること。

それは、まるで透明な檻の壁に、小さな紙切れを貼っていくような行為だ。誰にも気づかれなくても、確かに、僕が生きている証の一つ。

## 3. 祖父の死、物語の始まり

その日の夜、沈黙の残響の中に、母の押し殺した声が響いた。いつも感情を抑えている母の声が、少しだけ歪んでいる。

「…お義父さんが、今朝、亡くなったって…」

祖父、**義蔵**の死。享年 88 歳。

正直なところ、僕は祖父と深く話した記憶がない。寡黙で、厳格で、盆栽をいじる姿ばかりが記憶にある。父・誠一が僕に示した沈黙は、そのまま祖父から受け継いだもののように思えた。

「死んだ人のことなんて、どうでもいい」僕はそう心の中で呟いた。

物質的な成功も、地位も、名誉も、死を前にすれば無価値だ。その無価値なものに向かって、何を成し遂げたのか。自分の今に、どれだけチャレンジできたか。そのチャレンジの行き倒れこそ、**本望だったと**、祖父は言えるのだろうか？

僕は、祖父の死を前にして、初めてその問いを、自分自身の内側に感じた。それは、檻の中で、ずっと目を逸らしてきた、「生きる」ということへの静かな問いかけだった。

## 第一章：義蔵の章（死を知る世代）

### 1. 祖父の聖域

四十九日を前に、家の中は穏やかながらも慌ただしかった。親戚が訪れるため、光希の部屋の前の廊下も、母や姉が何度も行き来する。光希はドアを固く閉ざし、その気配を遠いものとして受け止めていた。

母と姉が祖父母の部屋を片付けている時、母の弱々しい声が聞こえた。

「この箱、鍵がかかってるわ。義蔵さんが持ってたなんて知らなかった。…中身、どうしましょう、誠一さん」「…捨てるのは忍びないな。中身が分からないものを、勝手に処分もできんだろう。」

父・誠一の言葉は、いつもどおり短く、感情がない。義蔵の遺品は、父にとっても触れがたい「沈

黙の核心」なのだろう。

数日後、光希はこっそり祖父の部屋に入った。部屋は線香の匂いが微かに残り、祖父の気配がまだ濃く漂っている。古い机の上に、その木箱は置かれていた。ニスが剥げ、使い込まれて黒光りしている。

光希が箱に触れたとき、背後から微かな衣擦れの音がした。

「…みっちゃん。」 祖母の登美だった。彼女は静かに微笑み、光希に小さな真鍮の鍵を手のひらに載せて渡した。

「私が持ってただけだねえ。お義父さん、誰にも見られたくないものを持っていただけだねえ。…見ても、怒られないよ。あの人はもう、遠いところへ行ってしまったんだから。」

祖母の言葉は、義蔵を責めるでもなく、ただ静かな共感に満ちていた。光希は、祖母の「責めないまなざし」に、いつも救われていた。

## 2. 箱の中の「鮮明な生」

光希は自分の部屋に戻り、鍵を差し込んだ。古びた真鍮が、軋むような音を立てて回る。

箱の中には、何が入っているのだろう。秘密の財産？隠された愛人の手紙？しかし、中身は予想とは全く違っていた。

- 墨で書かれた、古い日誌。
- 端が焦げたように黄ばんだ、数枚の手紙。
- 白黒の写真、一枚。
- 小さな、使い込まれた火鉢のミニチュア。

光希は、最初に日誌を開いた。そこには、大正末期から戦中にわたる、祖父の若い頃の言葉が、達筆な文字で書き込まれていた。

「昭和十八年。雪。招集令状が来た。母は泣き、父はただ黙っていた。生きて帰れる保証など、どこにもない。死ぬ覚悟は、とうにできていた。明日には、もうこの家も、この空も、目にすることが叶わぬかもしれぬ。故に、今日の空気、土の匂い、母の握った飯の味が、これほどまでに鮮明なのか。」

光希は息を呑んだ。戦後の豊かさの中で、僕たちは「死」を遠ざけ、見えないものにしてきた。だからこそ、「生きる」ということがぼやけ、目的を失った。

だが、祖父の生きた時代は違った。死が日常のすぐそばにあった。

「死を覚悟したからこそ、生きることが鮮明になった」一魂の言葉が、光希の頭の中で響いた。

光希は、次の手紙を手にとった。それは義蔵が戦地から妻・登美に宛てたものだった。短い文面だ。

「登美。今、山桜の枝を見ている。生きることは、耐えることだ。だが、それだけではない。お前と、生まれてくる子を守る。それが、わしの戦だ。決して、誰にも、この「家」を壊させてはならぬ。帰ったら、お前が作った漬物が食いたい。それだけだ。」

「家」を守ること。それが、義蔵の「生きる挑戦」だった。戦争という巨大な暴力の中で、彼は自分の存在意義をそこに賭けたのだ。その覚悟は、静かだが、鋼のように強かった。

### 3. 沈黙の連鎖

光希は日誌をさらに読み進めた。敗戦後の混乱、焼け野原からの再起、そして息子・誠一が生まれた日の記述があった。

「昭和三十五年。誠一が、わしに似て、言葉が少ない。登美は、もっと優しく接してほしいと言う。だが、甘やかすことはできぬ。この世は、戦場だ。男は、黙って強くあらねばならぬ。わしの背中を見て、生きる覚悟を学んでほしい。それが、父としての、わしの愛だ。」

光希は、手の甲で顔を覆った。

「そうか、父さんの沈黙は、ここから受け継いだのか…」

義蔵は、「言葉なき愛」を誠一に伝えようとした。それが、戦中を生きた彼の精一杯の愛情表現だった。

しかし、誠一はその沈黙を、「自分の感情を出すことへの禁止令」として受け取ってしまったのではないか。そして、誠一はさらにその沈黙を光希に伝えた。

義蔵の「命を懸けた沈黙」は、三世代を経て、光希の「出口のない沈黙」という透明な檻になってしまったのだ。

光希は、日誌の中の一文に、目を見張った。

「壁は、自分自身だ。」

日誌には、昭和三十年代に義蔵が、友人にもらったこの言葉を書き写し、赤線まで引いてある。義蔵は、この言葉に強く共感していた。

自分の命を懸けて守ろうとした「家」のあり方、自分の「沈黙の愛」の伝え方。それこそが、義蔵自身の檻だった。

光希は、部屋の隅に裏返しに立てかけてあった、あの未完成の絵をゆっくりと見つめた。

## 第二章：誠一と澄子の章（沈黙の世代）

### 1. 良き妻・良き母の檻（澄子の視点）

義父・義蔵の四十九日を控え、澄子（すみこ）は仏壇の前に座っていた。線香の煙が、茶の間を満たし、壁に染み込んだ家族の古い空気を呼び起こす。

「お義父さん、あなたは本当に強い人でしたねえ。でも…強すぎたのかもしれない」

澄子の脳裏に浮かぶのは、義父の静かな威圧感と、それを受け継いだ夫・誠一の無口な背中だ。

澄子と誠一が結婚したのは、まだ昭和の「男は外、女は内」という価値観が根強かった時代だ。誠一は地方銀行の真面目な行員として、家族を養うことに全力を注いだ。彼は義父と同じく、言葉少なだったが、澄子はそれを「男の責任感」と解釈した。

「私がお家の中を完璧に整えれば、彼は安心して外で戦える」

それが、澄子が自らに課した「良き妻・良き母」という名の檻だった。子どもが三人（遥、光希、結）生まれ、家庭は常に賑やかであるべきだと信じていた。

しかし、その賑やかさの裏で、澄子は常に孤独だった。

夫は家に帰っても、新聞を読むか、義父から受け継いだ囲碁盤に向かうか、ただ黙っている。「今日、学校でこんなことがあったのよ」「遥がこんなに頑張ってる…」と話しかけても、誠一は顔を上げ

ず、短く「そうか」「…だな」と答えるだけ。

誠一は、家庭の問題を澄子に「丸投げ」しているつもりはなかった。彼は義蔵から学んだ「沈黙による信頼」を示していたのだ。

**「家庭内は妻に任せ、自分は外で稼ぐ。それがお互いを立てるといふものだ」**

しかし、澄子の心の中には、別の声が響いていた。

**「あなたが、ただ一言、『お疲れ様』とか、『ありがとう』と言ってくれたら、どんなに救われただろう。子どもたちのこと、本当はあなたにも一緒に悩んでほしかった」**

澄子は、その本音を喉の奥にしまい込んだ。感情をぶつけることは「わがまま」であり、「良き妻」の役割を放棄することだと、固く信じていたからだ。

## 2. 以心伝心の断絶（誠一の二重性）

夫・誠一は、近所の高橋家や佐々木家の子どもたちには、笑顔で穏やかに話しかけた。

「翔太くん、勉強頑張ってるか。お父さんの言うこと、よく聞くんぞ」「陽菜ちゃんは、いつも明るくていいね。お父さんに似て、元気がある」

その姿を見るたび、澄子は違和感を覚えた。

**「なぜ、あなたはよその子には優しく、自分の子には厳しい沈黙を貫くの？」**

誠一には、悪意などなかった。彼は、自分の子どもたちには「言わなくても分かるはずだ」という、**義蔵譲りの以心伝心の期待**を抱いていた。

「遙には『長女だからしっかりしろ』とは言わない。言わなくても、あの子は分かっているはずだ」「光希は繊細だが、いずれ自力で立ち上がる。父として、安易に手を差し伸べてはならない」

誠一は、そう信じることで、子どもたちへの**愛情と責任**を果たしているつもりだった。しかし、子どもたちから見れば、それは**無言の圧力**であり、「期待」という名の重い重しだった。

光希が美術の道に進みたいと言い出したときも、誠一は黙っていた。

「…美術、か。好きにすればいい」

それが、誠一の精一杯の「応援」だったが、光希には「どうせ無理だと思っているんだろう」という諦めと突き放された感情だけが伝わった。

澄子もまた、夫の態度に反発できなかった。「男の世界のことは、私には分からない」と、沈黙に加担した。こうして、夫婦の間にあった沈黙が、子どもたちの世代に「**言葉なき断絶**」として受け継がれていったのだ。

## 3. 光希の檻と母の罪悪感

光希が家にひきこもるようになって、澄子の檻はさらに重くなった。

「良い母」であるはずの自分が、なぜ息子を部屋に閉じ込めてしまったのか。近所の目、特に高橋先生の妻・美和の「教師としての正しい視線」を気にするあまり、澄子は光希に寄り添うことよりも、「外に出なさい」「ちゃんと社会に適合しなさい」という言葉ばかりを浴びせてしまった。

その言葉は、光希にとっては「この檻から抜け出せないお前はダメな人間だ」という、責め立てる声にしかならなかつただろう。

ある夜、澄子は誠一に初めて声を荒げた。

「あなた！光希がこんなになったのは、あなたのせいよ！あなたは一度だって、あの子の目をちゃんと見て話したことがある！？」

誠一は、澄子を初めて見るかのように、驚いた顔で沈黙した。そして、静かに言った。

「…私だって、悩んでいる。だが、どうすればいいのか、私には…**分からないんだ**」

誠一の口から出た「分からない」という弱音は、澄子の怒りを一瞬で消し去り、深い孤独と絶望に置き換えた。

「**壁は、自分自身だ。**」 誠一もまた、義父から受け継いだ「男の役割」という檻の中で、もがき苦しんでいる一人の人間だった。

澄子は、線香の煙が天井に昇っていくのを見つめながら、静かに涙を流した。

「みっちゃん（光希）…あなたは、私たちが作った檻の中で、一人で戦っているんだね…」

### 第三章：遥の章（役割に埋もれる長女）

#### 1. 完璧な仮面の疲弊

遥（はるか）は、自分の手帳を開いた。細かく書き込まれた予定表は、公務員としての仕事、娘の学校行事、そして実家（光希たちの家）の様子見や手続きといった、様々な役割で埋め尽くされている。

「ちゃんとしなきゃ」

それは、遥の心の奥底に染み込んだ呪文だった。長女として生まれた瞬間から、彼女は家族の中で「模範」であることを求められた。両親が口にしなくても、その沈黙の空気の中に、「お姉ちゃんなんだから」という無言の期待が重くのしかかっていた。

父・誠一の無口な愛は、遥にとって「期待」として受け取られた。

「父さんは、私には何も言わない。それは、私が『言われなくてもわかる、立派な娘』だと信じているからだ。父さんの顔に泥を塗ってはいけない。」

遥は優等生として育ち、地元の大学を出て、公務員という安定した職業に就いた。母・澄子が望む通り、堅実な男性と結婚し、娘を授かった。外から見れば、完璧な人生。

だが、その完璧な仮面の下で、遥は常に疲弊していた。

「私ばかり」という思いが、心の奥に澱（おり）のように溜まっている。

#### 2. 役割の重圧と弟妹への感情

祖父・義蔵が亡くなってからは、実家の世話は遥が一手に引き受けている。香典返し、法事の手配、父と母の小さな争いの中和。実家にとって、遥は「機能」として欠かせない存在だ。

妹の結は、東京で自由奔放に生きているように見える。「家族の外」に出ることで自分を守った妹の選択を、遥は羨みながらも、心のどこかで「ずるい」と感じている。

そして、弟の光希。

光希のひきこもりは、遥にとって最も複雑で、最も痛い問題だった。

「なぜ立ち上がらないの？」という苛立ちと、「あんなに繊細だった子が、どうしてここまで追い詰められたのだろう」という深い憐憫が交錯する。

光希が、KHJ 岡山きびの会のHP 更新という形で、かろうじて社会と繋がっていることを知っても、遥は安堵よりも焦りを感じてしまう。

「ウェブサイトの更新なんて、そんな小さなことじゃなくて、**ちゃんとした仕事**をしなきゃダメなのよ。そうしないと、この家は、私たち家族は、世間からどう見られるの？」

遥の視線の先にあるのは、いつも**世間の目**だ。彼女の檻は、「他者から見た自己の評価」という、強固な透明な壁でできている。この壁が崩れれば、自分がこれまで守ってきた「立派な人生」が、一瞬で瓦解してしまうのではないかと恐れている。

### 3. 父との断絶と鏡

遥は、父・誠一が光希に対して何も言わないことに怒りを覚えている。だが、同時に、自分がその父に「頼られてしまう」ことに、わずかな**誇り**を感じていることも知っていた。

「父さんは、私には相談する。私が『ちゃんとした長女』だからだ」

しかし、その頼りは、遥の負担を増やして去っていった。ある晩、遥は父に電話で、祖父の法事の手配について相談していた。

「お父さん、引き出物のことでね、今回は少し趣向を変えて…」 「ああ。遥に任せるよ。お前が一番、そういうことはわかっているだろう。…済まないな、いつも」

誠一の「済まないな」は、遥への感謝と、自分の責任回避を隠すための言葉だった。その言葉を聞いた瞬間、遥の心の中の何かがプツリと切れた。

「お父さん…！」

遥は、言いかけた言葉を飲み込んだ。その言葉は、「もう限界だ」「私だって疲れている」だった。だが、それを口にすれば、父が、そして家族全体が崩れてしまうのではないかという恐怖が、遥の喉を締め付けた。

遥は、誠一の「沈黙」と、**光希の「ひきこもり」、そして自分の「完璧な仮面」**が、実は同じ素材でできていることに、薄々気づき始めていた。

- **父の沈黙**：感情を出すと役割が崩れる
- **光希の沈黙**：声を出すと傷つく
- **遥の沈黙**：弱音を吐くと「長女の役割」が崩れる

遥は、洗面所の鏡に映った自分を見つめた。その眼差しは、疲弊し、諦めと責任感でぎらついていた。

「壁は、自分自身だ。」 遥にとって、その壁は、彼女自身が作り上げた「理想の長女」の姿そのものだった。

## 第四章：結の章（家を離れた次女）

### 1. 東京の自由と罪悪感

結（ゆい）は、東京の古いカフェで、キーボードを叩いていた。フリーランスのライターとして、彼女は家族の暮らす地方都市から遠く離れたこの場所で、「自由」を謳歌している。

彼女の文章は、軽やかで観察力が鋭いと評判だ。特に、現代の若者の孤独や社会への違和感を詩

的に捉えるセンスは評価が高かった。だが、彼女が本当に書きたい「言葉」は、いつも指先からすり抜けていく。



本当に書きたいこと。それは、あの家のこと、そして兄・光希のことだ。

結は、幼い頃から家族の空気を読むのが誰よりも早かった。父の無言の圧力、母の無理した笑顔、姉・遥の張り詰めた緊張感。その重苦しい沈黙が、自分を窒息させる前に、結は逃げ出すことを選んだ。

「この家にはいられない」

上京する日、父・誠一は「頑張れ」と短く言い、母・澄子は泣きながら見送った。姉・遥は、まるで優秀な部下を送り出すように冷静だった。

結は、その時の自分を誇りに思っていた。透明な檻から、飛び立ったのだと。

しかし、時間が経つにつれて、その「自由」は「孤独」と「見捨てた罪悪感」に姿を変えた。

「私は、一番大切なものから逃げたのではないか？」

光希がひきこもっていると知ったとき、その罪悪感はピークに達した。彼は、自分が逃げた檻の

中に、ただ一人閉じ込められたままなのだ。

## 2. 家族の外から見た檻

帰省のたびに、結は家族の空気が以前よりも重くなっているのを感じる。姉・遥は、以前にも増して痩せ、完璧な「長女の役割」を演じることに疲れ切っている。父と母の間には、修復不可能な溝がある。

結は、家族の外に出たことで、彼らが囚われている「檻」の形が、はっきりと見えた。

- 父と母の檻：「こうあるべき」という昭和の役割論。
- 姉の檻：「ちゃんとしなければならない」という世間体と責任。
- 兄の檻：「誰にも迷惑をかけてはいけない」という自己否定と孤独。

誰もが、自分の意思でその檻の中にいるわけではない。それは、義蔵の世代から受け継がれた「沈黙」と「我慢」という文化の連鎖で編まれたものだ。

結は、カフェの窓から外を眺めた。東京の雑踏は、皆が自分のことしか見ていないように見える。

「自由」とは、誰にも期待されないことなのかもしれない。誰も気にかけない分、孤独が深まる。家族の檻の中には「重圧」があったが、外には「無関心」という別の壁があった。

## 3. 幼なじみ・陽菜との再会

ある日、結は仕事の打ち合わせで訪れた映像制作会社で、驚くべき人物と再会した。幼なじみの佐々木陽菜だ。

陽菜は、光希や高橋家の翔太とよく遊んでいた、あの奔放で明るい少女だった。彼女もまた、地元の「家」の反対を押し切って、東京で映像制作の道を選んでいった。

「あー、結じゃん！元気にしてたの？相変わらず、東京の空気吸ってるねえ」陽菜の飾らない言葉に、結は少し安堵した。

結は、おそろおそろ光希のことを切り出した。

「兄、今も家にいるんだ…」 「知ってるよ。お母さんから聞いた。…光希、あんなに繊細だったからね。あの家の空気、一番敏感に感じてたのは、あいつだと思う」

陽菜は、コーヒーを一口飲んで言った。

「私たち、みんな檻の中で遊んでたんだよね、あの頃。高橋くん（翔太）は『正しい子』の檻。光希は『優しい子』の檻。私は、『貧乏な家の子』の檻。でも、檻の形が違うだけで、みんな窮屈だった」

陽菜は、自分の家庭の経済的な事情や、駆け落ちした両親が周囲から偏見の目で見られていたことを、あっけらかんと話した。彼女の「自由」は、**社会の偏見という壁を打ち破るための、必死の挑戦**だったのだ。

結は、陽菜の言葉に、衝撃を受けた。

「私も、光希のことを『立ち上がらない人』って、どこかで責めてたかもしれない…」

陽菜は、静かに首を振った。

「違うよ、結。光希は、あの中で**戦い続けてるんだ**と思う。一番、自分の本音と、家族の呪縛を直視してるのが、光希なんだよ」

その夜、結は光希にメッセージを送った。未送信のまま、何度も消しては書き直している。

「お兄ちゃん。今度、帰省するね。…あなたの檻の周りを、風が吹いているのを知ってるよ。」

結は、自分の「本当に書きたい言葉」が、兄の「透明な檻」の中にこそあるのではないかと感じ始めていた。

## 第五章：光希の章（檻の中の声）

### 1. 祖父の遺言と、立ち尽くす自分

光希は、祖父・義蔵の日誌と手紙を、繰り返し読み返していた。

義蔵の言葉は、まるで戦場からの通信文のように、短く、飾り気がなかった。だが、その根底には、「家を守るために命を賭ける」という、猛烈な生の肯定があった。

「生きることは、挑むことかもしれない。」

光希は、その言葉を自分の人生に重ねてみた。自分は何に挑んでいるのだろうか？ 部屋に閉じこもり、家族会のウェブサイトを更新する。それは、小さな小さな、「傷つかないための挑み」だ。

外の世界は、「自己責任」と「自由」を振りかざし、光希に問いかける。

「なぜ、あなたは檻の中にいるのか？ 自分で決めて、出てこい」

だが、光希には、その声が、かつて自分を追い詰めた声と重なって聞こえる。

### 2. いじめの記憶と「偽の平等主義」

光希の「透明な檻」の壁は、いじめの記憶というセメントで固められていた。

小学生の高学年。光希の感受性の強さや、絵を描くことが好きな性質は、集団の中で「異質なものの」として浮き上がった。

「気持ち悪い」「空気読めよ」「お前はみんなとは違う」

それは、ただの悪意ではなかった。それは、「みんなと同じであること」だけが許される、狭い集団の中で、「違い」を排除するという、日本的な同調圧力の裏返しだった。

そして、教師や親たちは、いつも「仲良くしなさい」「お互い様だ」と、「偽の平等主義」を主張した。彼らは、加害者と被害者の間の構造的な力を見せず、「問題は双方にある」と処理することで、その場を収めようとした。

「先生たちは、僕の苦しみを『みんなの問題』にして、見えないようにしたかったんだ。僕の存在が、学校の『正しい看板』を汚すから。」

光希は、あの時、自分の声を出すこと、自分の「違い」を主張することが、いかに恐ろしいことかを知った。声を上げれば、さらに深く、社会から排除されてしまう。

だから光希は、声を出さなくなった。美術大学に進み、表現の場を得たかに見えたが、結局、それでも周囲の才能や世間の評価と比較されるプレッシャーに耐えられず、自己否定の波に飲み込まれた。

光希の檻は、外の世界の「お前はダメだ」という声と、内側の「迷惑をかけるな」という声が、共鳴してできたものだった。

### 3. 妹・結からのメッセージ

そんな光希の心に、静かな波紋を起こしたのが、妹・結からのメッセージだった。

「お兄ちゃん。今度、帰省するね。…あなたの檻の周りを、風が吹いているのを知ってるよ。」

光希は、そのメッセージを何度も読み返した。「風」。それは、祖父の手紙にも、荒野に立つ自分の未完成の絵にも、共通して流れている目に見えない力だ。

結は、家族の外に出たからこそ、光希の沈黙が「戦い」であることを知っている。

光希は、パソコンを開き、KHJ岡山きびの会のウェブサイトの更新作業を始めた。会報PDF、イベントバナー。そして、会員の「声にならない声」を掲載するコラム欄。

彼は、そこに、自分の心を映した思い込めていた。

「誰もいない部屋の隅で、私は自分の影から逃げようとしていた。いくら走っても、影は消えない。それは、自分自身だからだ。私は、この影に立ち向かわなければならない。倒れてもいい。それが、私自身の、生きた証になるのなら。」

それは、義蔵の「死の覚悟」と、光希自身の「逃げて逃げきれない自分」への問いを重ねた言葉だった。

### 4. AIとの対話、表現の再発見

光希は、表現の手段を模索していた。絵は描けない。言葉は、家族の中で機能しなかった。

そんなとき、彼はKHJ岡山きびの会のひきこもり支援の一環で知ったAIツールを使ってみることにした。自身の書いた掌編や、過去の絵のモチーフ、家族の風景を表現した言葉を入力し、AIによる短い動画を生成してみる。

静かなBGM、モノクロの風景、そして祖父の日誌のような短い言葉のテロップ。光希が編集したその動画は、沈黙と孤独の美しさを、静かに描き出していた。

「これなら…、僕の声を出せるかもしれない」

顔も声も出さずに、自分の内面にある「檻の風景」を、誰にも迷惑をかけずに、世界に届けることができる。それは、光希にとって、新しい「挑戦」の始まりだった。

「倒れてもいい。それが、僕の生きた証になるなら。」

光希は、その動画を、家族会のウェブサイトの隅に、匿名でそっとアップロードした。

## 第六章：再会の章（共鳴する沈黙）

### 1. 四十九日の静寂と、不協和音

義蔵の四十九日。実家の仏間には、誠一、澄子、遥、そして東京から戻った結が顔を揃えていた。隣家からは、高橋先生も線香を上げに訪れている。

部屋を満たすのは、読経の響きと、時折聞こえる衣擦れの音だけだ。親戚たちが帰った後、残った家族と高橋先生の間には、重苦しい「いつもの沈黙」が流れていた。

誠一は相変わらず言葉少なく、高橋先生も「教育者としての正論」を口にすべきか迷っているような、落ち着いた様子だ。

「……光希くんは、今日も、お部屋かな？」

高橋先生が、探るように澄子に尋ねた。澄子は困ったように微笑み、一瞬、階段の方に目をやった。

その時、リビングの大きなテレビ画面が、不意に点灯した。

「あ、ごめんなさい。私が設定を触ったかも」

結がリモコンを手に取るが、画面には放送番組ではなく、一つの動画が映し出されていた。光希が昨日、家族会のサイトに匿名でアップロードした、あのAI動画だった。

## 2. 映し出された「心の風景」

画面には、モノクロの古い家並み、揺れる山桜、そして、暗い部屋の窓から差し込む一筋の光が映し出されていた。

BGMは、微かな風の音と、心音のような静かなリズム。

テロップが流れる。

「私たちは、自分を守るために檻を作った。」

「祖父は、戦火から守るために。父は、役割を果たすために。」

「私は、傷つかないために。」

家族全員が、画面に釘付けになった。誠一の持つ湯呑みが微かに震える。

「でも、檻の壁は透明だ。私たちは、隣にいる人の震えを見ているのに、触れることができない。」

『「迷惑をかけてはいけない』という言葉が、私を一人にした。でも、死を覚悟した祖父が見た空は、きっと、もっと鮮やかだったはずだ。』

動画の最後、荒野に立つ人物の足元にあった鎖が、砂のように風に吹かれて消えていく。そして、光希がずっと裏返しにしていたあの絵が、カラーで鮮明に映し出された。未完成だったはずのその絵には、今、キャンバスの端に「小さな名もなき花」が描き加えられていた。

## 3. 崩れゆく壁

動画が終わっても、部屋は静まり返っていた。しかし、それは以前の「断絶の沈黙」ではなく、何かが共鳴し、震えている沈黙だった。

「……これ、光希が作ったのか？」

誠一が、絞り出すような声で言った。その声は、かつてないほど揺れていた。

「お兄ちゃん、ずっと戦ってたんだよ」結が静かに言った。「お父さんの背中を見て、お母さんの顔色を伺って、誰にも迷惑をかけないように、自分の心を殺して……。でも、お兄ちゃんは、おじいちゃんが命を懸けて守ったこの『家』の重さを、誰よりも一人で背負ってたんだよ」

高橋先生も、眼鏡を外して目元を拭った。「……私は、『正しい道』を示すことばかりを考えていた。でも、光希くんが見せてくれたのは、正しさではなく、『痛み』だった。私たちは、彼の痛みを『問題』として処理してしまったのかもしれない」

その時、階段を降りる、ゆっくりとした足音が聞こえた。

家族全員が息を呑んで振り返る。そこには、数ヶ月ぶりに部屋を出て、法要の場に現れた光希が立っていた。

#### 4. 初めての「声」

光希は、痩せて顔色も白かったが、その瞳には不思議な強さがあった。

「……おじいちゃんの日記を読んだんだ」

光希の声は小さかったが、不思議と皆の耳に届いた。

「おじいちゃんは、死ぬのが怖くなかったんじゃないかって、死ぬ覚悟をすることで、一瞬一瞬を必死に生きたんだってわかった。……僕は、傷つくのが怖くて、死んだように生きてた」

光希は誠一を見た。

「父さん。僕はもう、『迷惑をかけない良い子』でいるのは、やめる。……僕の、この出来損ないのままの姿で、もう一度、絵を描きたい。それが、僕の挑戦だから」

誠一は立ち上がり、光希の肩に手を置こうとして、躊躇した。しかし、光希が自分から一步近づき、父の震える手を取った。

「壁は、自分の中にあっただ。……父さん、一緒に、この透明な檻を壊していこう」

澄子は声を上げて泣き、遥もまた、完璧な長女の仮面を脱ぎ捨てて、光希の背中に手を添えた。

その瞬間、義蔵の四十九日は、家族の「葬儀」から、新しい「生の始まり」へと変わった。

### 終章：荒野に咲く花

#### 1. 檻の解体作業

義蔵の四十九日から半年が過ぎた。

あの夜、光希が口にした「一緒に、この透明な檻を壊していこう」という言葉は、家族全員にとって、長年の沈黙の慣習を打ち破る「呪文」となった。

父・誠一は、銀行を定年退職し、義父の残した火鉢のミニチュアを眺めながら、古い囲碁盤に向かい続けた。だが、今はもう一人ではない。近所に住む高橋先生を家に招き、二人で言葉を交わすようになった。

「私は、義父から沈黙しか学ばなかった。それが、家族への愛だと思っていた」誠一がそう語ると、高橋先生は静かに応じた。「私たちも、声なき規範という檻の中で生きてきました。今からでも、新しい愛し方を学ぶことはできるはずですよ」

誠一は、光希の部屋のドアを叩き、「散歩に行かないか」と誘うようになった。返事がなくても、彼は決して責めない。ただ、自分の言葉の短さを受け入れ、待つことを学んでいる。

母・澄子は、「良き妻・良き母」の役割から解放され、自分自身のための時間を持ち始めた。かつて押し込めていた絵画への興味を再燃させ、地域の絵画教室に通い始めた。彼女の描く絵は、窓から差し込む光のように、優しく、穏やかだった。

長女・遥は、公務員の仕事を続けながらも、「完璧であること」の呪縛を解き放った。妹・結に実家の手伝いを遠慮なく頼み、時には夫に弱音を吐けるようになった。「長女だから」ではなく、「私だからできること」に、静かに情熱を注いでいる。

#### 2. 光希の挑戦

光希は、まだ完全に「外の世界」に戻ったわけではない。しかし、彼はもう、部屋のカーテンを閉

ざしていない。朝の光が、彼のキャンバスを照らしている。

彼は、大学を辞めた後、裏返しにしていたあの未完成の絵を、再び描き始めていた。鎖は消え、荒野に立つ人物は、もはや飛ぶのか落ちるのか迷ってはいない。彼は、その荒野の土の中から、無数の小さな花を生み出している。それは、踏みにじられても、必ず種を残し、次の世代へと繋がっていく命の力だ。

光希は、KHJ 岡山きびの会のウェブサイトをきっかけに、YouTube などにも匿名で動画をアップロードし続けている。それは彼の「檻の風景」の記録であり、また、「檻を壊すための槌（つち）」でもある。彼の動画は静かに反響を呼び、共感の声が届き始めている。

ある日、妹の結が帰省したとき、光希は勇気を出して、自分の未完成だった絵を見せた。

「この花は、誰にも見られなくても、自分の場所に咲いている花。僕の、生きた証だ」  
結は、兄の言葉に涙を滲ませた。「お兄ちゃん。それは、おじいちゃんが守りたかった『家』だね。場所や形じゃなくて、あなたの心の中の、命のあり方そのもの」

結は、兄の姿に背中を押され、東京で、自分の家族の物語をベースにした連載を始める決意をした。それは、彼女自身の「自由の孤独」との決別だった。

### 3. 壁は、自分自身だ

光希は、自分の部屋の窓を開け放った。外の空気は、少し湿っていて、土の匂いがする。

祖父・義蔵が日誌に書き残した言葉が、静かに光希の心に響いた。

「壁は、自分自身だ。」

義蔵の壁は「死の覚悟」であり、誠一の壁は「沈黙の責任」であり、遥の壁は「完璧な役割」だった。

そして、光希の壁は、「傷つくことへの恐怖」と、「迷惑をかけてはいけない」という自己否定だった。

だが、今、彼らがようやく理解したのは、壁とは、乗り越えるべき障害ではなく、「自分が何者であるかを定義づける、唯一の足場」であるということだ。

光希は、キャンバスの前に立つ。荒野に咲く小さな花は、力強く、そして穏やかだった。

(物語 完)

## 登場人物紹介

この物語に登場する主要な人物と、彼らがそれぞれ囚われていた「透明な檻」の正体を紹介します。

| 名前                   | 世代/立場   | 「透明な檻」の正体                          | 挑戦の方向性                 |
|----------------------|---------|------------------------------------|------------------------|
| 藤森 光希<br>(ふじもり みつき)  | 孫(主人公)  | 傷つくことへの恐怖と、自己否定(「迷惑をかけてはいけない」という声) | 匿名での映像表現と絵画による自己肯定     |
| 藤森 誠一<br>(ふじもり せいいち) | 父/息子    | 沈黙の責任(「男は黙って強くあるべき」という役割)          | 言葉によるコミュニケーションと感情の表出   |
| 藤森 澄子<br>(ふじもり すみこ)  | 母/嫁     | 良き妻・良き母の役割(「家庭を完璧にすべき」という世間体)      | 自分自身のための絵画への挑戦         |
| 藤森 遥<br>(ふじもり はるか)   | 長女/姉    | 完璧な役割の重圧(「長女だからちゃんとしなければ」という期待)    | 役割からの解放と、弱さの開示         |
| 藤森 結<br>(ふじもり ゆい)    | 次女/妹    | 自由の孤独と見捨てた罪悪感(家族を置いて逃げたという負い目)     | 家族の物語を言葉にするライターとしての挑戦  |
| 藤森 義蔵<br>(ふじもり よしぞう) | 祖父/家長   | 命を懸けた沈黙(「家を守り、耐え抜くことこそが愛」という戦中の規範) | 日誌と遺品を通して、孫に「生の鮮明さ」を継承 |
| 藤森 登美<br>(ふじもり とみ)   | 祖母/妻    | 責めないまなざし(家族の沈黙を静かに見守り、光希を救う存在)     | 家族の間に唯一残された、共感の橋渡し役    |
| 佐々木 陽菜<br>(ささき ひな)   | 光希の幼なじみ | 社会の偏見(「貧乏な家の子」という周囲の目)             | 映像制作という表現による社会との闘い     |

## あとがき（作者の言葉）

『透明な檻の中で 3』～ある家族と三つの時代の記憶～をお読みいただき、誠にありがとうございます。

この物語は、戦前・戦中から現代に至る三世代の家族を通して、日本社会に深く根付いた「沈黙の文化」と、**そこから生まれる「見えない檻」**の正体を追ったものです。

祖父・義蔵の「命を懸けた沈黙」は、戦後の父・誠一の「責任感による沈黙」へ、そして孫・光希の「自己否定による沈黙」へと、世代を超えて連鎖しました。誰も悪意はなかったにもかかわらず、その沈黙は「言わなくてもわかるはずだ」という**期待**と「迷惑をかけてはいけない」という**恐れ**を生み、家族一人ひとりを孤立させたのです。

ひきこもりの問題は、しばしば個人の「怠惰」や「意志の弱さ」として語られがちです。しかし、この物語を通じて私たちが問いかけたかったのは、「私たちは、彼らが声を出すことを許してきただろうか？」という問いです。偽の平等主義、同調圧力、そして「立派な親・子であるべき」という役割論。これらすべてが、光希の部屋の窓を閉ざした透明な壁の素材でした。

物語の鍵となったのは、義蔵の日誌に書き残された「壁は、自分自身だ。」という言葉です。

壁は外の世界との境界線であり、同時に、**自分が何に挑戦し、何を肯定するか**を決めるための、唯一の足場でもあります。光希が部屋から一步踏み出したように、そして誠一が初めて弱音を吐けるようになったように、壁を壊すとは、「自分自身の役割や恐怖」という名の壁を、自らの手で解体することに他なりません。

光希が、誰もいない荒野で小さな花を咲かせたように、私たち一人ひとりが、自分の心の中の荒野で、小さくても確かな「生きた証」を見つけられることを願ってやみません。

改めて、光希とその家族の物語を最後まで見届けてくださった読者の皆様に、心より感謝申し上げます。

令和8（2026）年 立春

KHJ 岡山きびの会 “ふじさん”